
君はアイドル

レオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君はアイドル

【Nコード】

N8327Y

【作者名】

レオ

【あらすじ】

星に誘われて、今、話題沸騰中のベルガク工房のコンサートに行くことになった癒菜。

コンサート会場はうるさくて、外に出た癒菜。

そこで、ある人に会って・・・?!

* 第1話* (前書き)

連載2作目です

更新速度、遅くなったらすいません(汗)

第1話、ご覧くださいませ

登場人物

・ 東堂癒菜とうどういゆな・・・高2、クールな性格、

超がつく美少女。女優セシルの娘。

・ 星空季唯せいくみきい・・・高2、元気満タン。毎日ツインテールの

可愛い子。ベルガク工房とオシャレが大好き

・ ベルガク工房のメンバー(計5人、全員高2)

折原零おりはられい・・・リーダー、俺様、ボーカル担

白田皇しじょう・・・副リーダー、草食、ボーカル担、ギター担

仲居翔なかいしょう・・・メンバー、ムードメーカー、ドラム担

新井真あらいしん・・・メンバー、子供っぽい、ギター

井坂雷いさからい・・・メンバー、DS、キーボード担

白田桐也しむたきりや・・・20歳、美人好き、癒菜大好き、人と比べると結構

なエロさ

* 第1話*

「癒菜〜ツツツ」

読書しているあたしに走って近付いてきたのはツインテールの可愛い女の子。

名前は星空季唯^{せいくんきい}、高校2年生の元気満タンの子。

ちなみに、あたしは東堂癒菜^{とうどういゆな}、高校2年生のよく

「クールね」って言われるような性格らしい。

「星^{せい}、ドジして扱けたりしたら、危ないよ」

「大丈夫〜！つたあ！？、うわあっ！！！」

ドスツと鈍い音がして、次には「いたあっっ」って言う星の声が聞こえた。

多分・・・いや。絶対にものすごく痛いよ、思うんだけど

「予告したにも関わらず何やってんの・・・。」

「いやあ、ごめんごめん〜」とまあ、確実に次は気をつけようとか言う

注意書きは星の頭に無いみたいだね・・・（苦笑）

「あ！でさでさっ！癒菜、明日用事とかない！？」

「別にないよ」

「あのね！明日、ベルガク工房のコンサートだあるの！でね！

そのコンサートに、わたし、あたっちゃんだあ〜！」

「そうなんだ、よかったね？」

別に特に興味をもっていない私からすれば

どれだけ親友でも正直どうでもよかったりする。

「本当によかったあっ！あ、それでね！そのコンサートのチケット2枚あるから

もう1枚癒菜にあげるからついてきてほしいのっ」

「は・・・？なんであたしまで・・・」

「いやあ・・・ほら、私すぐ迷子になってなにがなんだかさっぱり

になっちゃって・・・」

「はぁ・・・。ほんと、世話の焼ける子ね？ま、いいよ、ついてってあげる」

「やったあっつ！癒菜って本当いい人！最高！ダイスキッ」
そういつてガバツと抱きついてきた

黒いツインテールがあたしの首に当たってくすぐったい

「星、くすぐったあい・・・。つか、くるしいっ」

首にがっしり手を絡ませてるもんだから、苦しくて仕方ない

「へへえんっ掛かったなあ〜！」

「わ、わあつかった！何をおのぞ・・・う・・・」

あたし、撃沈。

苦しすぎ・・・。

「あれ、癒菜がしんじやったー（笑）」

「んもー・・・馬鹿星・・・星へ帰れーっ」

こんな感じで、あたしは明日、ベルガク工房のコンサートに行く事になった。

*** 第2話* (前書き)**

第2話ご覧くださいませ

* 第2話*

「癒菜、ごめえーん！まったあ〜？」

「大丈夫、あたしも来たところだよ。」

「そっかあ！じゃ、よかった！！さてと！！いこっか！」

今日は星に誘われてベルガク工房のコンサートに行くんだけど正直、興味ないあたしは多分詰まんない顔だと思う・・・ま・・・星は素でぼけてるから気付いてないけどね

「ね！癒菜！今日の服どう思う？」

「ん？可愛いと思うよ？星っぼく、キュートだし」

「やっぱり？？よかったあ！わざわざ買った意味アリアリだあ〜」
ニコニコしながら首をブンブンとなぜかふりながら嬉しそうにしゃべる星。

まあ・・・こう言うのがあるから、憎めない・・・んだよ

てか、隣にいるからそのツインテールがあつて痛いんだけど・・・

「星、痛い」

「え？あははっ！ごめん〜！てかさ、癒菜の服

クールで大人でいいなあ〜っ」

あたしの服を見て、うきゃきゃと喜ぶ星。

これのどこをみていいなあと言ったのかさっぱりだ。

黒縁のダテめがねに制服のカッターシャツに縞模様のネクタイ

黒いスキニージーンズにハイヒール、髪の毛は下ろしたまま。

すぐくすぐくすぐ〜く、普通なんだけど・・・

「しかもー！セクシイッッ」

星が目ハートにしながら、あたしの胸元をみた。

いつもの癖で、カッターシャツのボタンを4個目ぐらいまで留めていなかった。

まあ、下着が見えるわけでもないけどさ

「これ、セクシイなの？と言うか、ついたけど・・・」

星がえ！？といわんばかりに振り向くと

案の定、人にぶつかるわけ・・・でね

「ご、ごめんなさい！」

「んも、気をつけてね？」

優しそうなおねえさんだ。

ファッションは星と似てるかな？

「おねえさん！その服、どこで買ったんですか！？」

「え・・・？これ、手作りよ？」

「そうなんですかあ！？すごいすごい！その作り方おしえてくだ

さあい〜！」

おいおい・・・ここで言うか・・・

そんなもの断られるに決まって・・・

「いいわよ〜！あなた、座席どこかしら？」

「アリーナ席の - です」

「あらあ！私とお隣ね！ラッキーだわ〜、あなたみたいな子が横で

〜！

さ！いきましようか！」

「はい！癒菜、いこ！」

・・・。

何故こうなったのかあたしには不明すぎる・・・。

星の人見知りしなさすぎる性格には「あ」もいえない・・・

会場に入ると、ざわざわ、がやがや、うるさいったら・・・

あたしはうるさいところが結構苦手・・・。

席に着くと、星と比奈さん（さっきのおねえさん）は

すでに服のはなしとベルガク工房の話で大盛り上がりだ

「ごめん、星、あたし外のカフェにいるね？」

コンサート始まってもしないかもしれないけど、放っておいていい

から」

「うん、わかった！あ！それでね
なんて薄情な子だ・・・
まあ、いいんだけどねえ」

外に出ると、もうほとんど人はいなくて

カフェなんて誰もいなかった。

「いらつしやいませ、ご注文お決まりですか？」

「コーヒーのブラックで」

「かしこまりました」

やっぱりベルガク工房って人気あるね

えっと・・・

メンバーは折原零おりはられいと白田皇しろただこうと仲居翔と

新井真あらいしんと井坂雷いさからいだったっけな？

で・・・星が好きなのが仲居翔君だったっけ。

そういえば皆、高2なんだよね

なんか、高2でアイドルって多分、てか絶対すごい

こんな事を考えて、多分15分ぐらいだった頃だった

「君、コンサート会場に入らないの？」

不意に後ろで声が聞こえて振り返った

「中はうるさくって、外に出てきてるんです」

帽子を深く被ったその子は、男性なのにきれいな肌で

長身で、顔はアンマリ見えないけど、世間で言うイケメンと言つても

のだと思う

「え、じゃあコンサート来てる意味って・・・？」

「ああ・・・、友だちが素ボケちゃんで、ドジだから

付き添いみたいなので来たんです。正直、あたしはベルガク工房に

興味無いんで・・・（苦笑）まあ、大体のことは知ってますけど・・・

・って

なんか、すいません。(汗)「

やば・・・長くしゃべりすぎた・・・。

「そういう事ね・・・?って・・・これ零に知られたら、君えらい目にあうね・・・」

「零ってベルガク工房のリーダーですか?」

「うん、そうだよ。あ・・・てか、君僕の事誰かわかって・・・ないよね?」

「ええ、まったく。まず顔、見えてませんし。」

「やっぱりね・・・ま、ファンとかじゃなさそうだから、バラしてもいいかな。」

そういうと、その男性は帽子をひょいと取り、机に置いた

「・・・白田皇・・・?」

そのキレイな肌の男性は明らかにベルガク工房の副リーダー、白田皇だった。

「驚かないね?」

「え・・・ええ、まあ、ちょっと動揺してますけど・・・

てか、なんでいるんですか?後5分とかではじまるんじゃ・・・?」

「なんか今、トラぶってるみたいだね・・・?僕、そういうの苦手です」

「そうなんですか・・・なんか、テレビとは違いますね、やっぱり」

「え?そのやっぱりの意味はなに・・・?」

「ほら、テレビじゃドがつくSですよ?ケド、今、SでもなければMでもない

極普通の男の子って感じで。まあ、テレビ見てたら大抵分かりますけどね?」

「ま・・・キャラ作ってるからね・・・?僕結構が弱いよ」

「男でもか弱いのは仕方ない事ですよ。と言うか、ソロソロいったほうがいいんじゃない?」

もう20分はたってるかと?」

あたしとしゃべってる間に実は時間は大いに過ぎていた

大丈夫なのか、あたしにはまったく不明で・・・

「そうだね、もう行こうかな。ああ、ついでに、君も一緒に来て？」

「は・・・？なんであたしまで？！」

さすがにこの発言にはびっくりだ。

いきなり来いとか・・・つか、ついでってなに？！

「マネージャーにぴったしかと」

「はああ?!」

「アイドルにはあはないでしょうよ？」

なんか、皇君テレビキャラに戻ったし！

「あたし、一般客ですよ？てか、そっちのほうの資格とか・・・」

「大丈夫、資格なんて僕たちでごまかすし。んじゃあ、行くぞ」

やばあ。こいつまじでSだろ!!

「ちよ、まっ・・・。もう・・・。」

あたしは諦めて、拒絶していた状態をやめて

渋々ついていく事した。

***第3話* (前書き)**

第3話をご覧くださいませ

* 第3話 *

カフェであって、なぜかマネージャーに任命されてつれてこられたところは、楽屋・・・らしい。

「ここが俺の楽屋。入って、ちょっとまってて？」

「ああ・・・はい」

楽屋全員別々なのか・・・。

恐るべし、ベルガク工房

部屋に入ると、何かすっごい普通の部屋なわけで・・・
ベットあるし、シャワー室あるし、キッチンまでも・・・
ああ・・・そうか、ベルガク工房は一定の場所でしかコンサートしないんだっけ？

あたしは入ってすぐのところのドアに寄りかかって
また、本を読み出した。

タッタッタッタッタ・・・！！

ばんっ！

ドアが勢いよく開いたかと思うと

皇君が息を切らして、あたしに言った

「ごめん！なんか、トラブル酷いらしくて！解決したらすぐ始めるから

後・・・3時間、ぐらい待っててもらえる?！」

「ああ・・・ハイ。」

「コレ、渡しとくから！コンサート見たかったらコレ、スタッフに見せて？」

誰か聞かれても、コレ見せて名前言ってね！それじゃ！」
ばしんっ！

今度は勢いよく閉まる。

・・・嵐だ・・・。

てか、別にこんな無くてもいけるんだけどね・・・

あたしは仕方なく、皇君の部屋にあるソファーに座って本を読み始めた。3時間か・・・5冊で足りるだろうか・・・(1冊30分)

10分ぐらいたったときだった。

外から「みんなーっ！待たせたねっ！！！」と言う声が聞こえた。

えーっと・・・始まったのか？

で、多分・・・この声はリーダーの零か

さすが、声通るね

声もキレイだし

歌手って感じるねー！。

1時間ぐらいたった頃だろうか。

廊下から声がした

『翔どこへいったんだあぁっ』

この声、零君？

『なに？お前そんなに零が気になんの？』

『え、ああ、まあ・・・』

『零のくせして、きもちわりい』

『おま！てめえの部屋も見んぞ！』

あたしの予想だと、これはコンサートでよくある劇みたいなものかな。

声、大分通ってるみたいだし

会場と映像でつながってんだろな

あ・・・てか、今の状況だと

あと少しでココにくるわけだよね・・・？

つて、どうすんの！！！！

・・・ココは、あたしの才能で切る抜けてやるうじやない・・・！

あたしは、本を閉じ、カバンに入れて、カバンからめがねを取り出しかけて

ネクタイをきつちり締める。

「よし。」

ドアを開けて、外にでる。

1mぐらい先に零君と皇君がいた。

皇君は目を見開いて、「なんで出てきてんの?!」みたいな顔をしている。

・・・あたしの才能嘗めないでいただきたいものだ

あたしはスタスタと歩いていき、カメラをよけて通りすぎた。

「おい！お前！誰だよ?!」

零君が声をかけた。

そりゃそうだ、知らないでしょうよ

「おはようございます、こちらのスタッフの東堂癒菜です。」
頭を下げてそこをさった。

これこそ、あたしの才能、「演劇」だ。

即興でやれといわれてもできるぐらいにはある。

なぜかって？まあ・・・一応親は今人気の女優、芸名セシナ

本名東堂春千佳だからねえ・・・。

舞台裏まで行くと、スタッフさんがこっちをみてぎよっとする。

これまあ、当たり前前だと思っ。なにしろ、知らない人だし。

「ちょ、君！部外者は・・・!」

「セシルの娘です。」

「セシル・・・?つて、え!?あの人気女優の?!」

「ええ。」

「す、すいません！どうぞ、こちらに！」

「いえ、結構です。その近くで見せてもらいます」

ほらね、皇君に渡されたものなんて必要なし。

まあ・・・あんま親の名って使いたくないんだけどね。

近くでみるものの、思う事は同じでね・・・

「やっぱり・・・うるさい・・・」

はあ・・・楽屋に戻りたい・・・。

でも戻れる状況じゃないし・・・

皇君やらがココに戻ってきたら、そそくさと戻ってやる・・・

***第4話* (前書き)**

第4話ご覧くださいませ

* 第4話 *

10分ぐらいして、やっと皇君達は舞台裏のほうに戻ってきた。もちろん、翔君を連れて。カメラも回った状態だ

零君がこっちを見て、怪訝な顔をしたけど

あたしはニッコリ微笑んでペコリと頭を下げた。

翔君もこっちをみて目を見開いた。これもまあ、何でいるの？ 的な奴ね……。

ま、今はスタッフ兼セシルの娘〃大物の子供〃大事な存在、だけどさ

皇君たちが舞台に戻って、あたしも楽屋に戻ろうとした。

が……そのとき、舞台から予想外に声が聞こえた

『翔も見つかった事だし！ 暇だから、美少女さがしでもない？

会場の皆さんの中で！！！！』

零君だ。

会場は『きゃあああ！！と嵐のような声が聞こえた

まあ、ここまでは別に何と思わなかった

『俺かわいい子しってんでえっ！ 今、つれてくる！！』

そついうと舞台裏にピョンピョンと来て

あたしの前までくると『来て！』と、ニコニコしながら言われた。

……は……？

何であたしなんだ……？

意味わかんないけど！？！？？？

「な、なんであた……私なんでしよう？？？」

「かわいいから！ ほら！ はやく！」

そついつてから耳元で「君、セシルさんの娘さん、だろ？」と囁いた。

・・・なに、それ。

まあいい、ここも演じるしか方法はない。

あたしはネクタイを緩め、ボタンも4つ目まではずすした

舞台に行くときまあ、そこには「なんでおまえ!？」って言う零君と

「戻ってなかったのか?!」って言う皇君が・・・ね

まあ、翔君はそんな事もお構いなしで

「セクシーで可愛い子でしょ!」

と、零君と会場に笑いかける。

会場はシー・・・ンとしている。

や、やばい・・・ここはもう、あたしの出る幕じゃないわ・・・。

「あたし、時間がないの。だから、こちら辺でおさらばします

ごめんなさいね、それではシユウアゲイン」

そういつて、さり際に皇君に「ごめんなさい」といっておいた。

舞台裏に戻ると、あたしはスタッフの目にもくれず

カバンを取って、めがねをはずし、楽屋に戻った。

「はぁ・・・。もう、ココにはいちゃいけないかな(笑)」

楽屋に戻って、最初に呟いた言葉だった。

なんとなくだけどさ、いたら、いろんな人を困らせてしまいそうなんだ

あたしはメモ帳に『いらない事をしてごめんなさい。』

マネージャーの件はお断りします。ありがとうございます。by

癒菜』

と、書いた。

「名前・・・知らないけど、まあ、いいかな」

あたしは、楽屋を出てさっきいたカフェとは反対側にあるカフェへ行った。

そして、また、本を読む。

自分でも思った、なんて波乱万丈な展開なんだ・・・と。
正直言つて、あたしはいつもこんな感じだ。
こんな感じで、最終的には人を困らせてしまう、最悪なんだ・・・

本を2冊、読み終えた頃だった。

リロリンリロリン

メールが来た。

「星じゃん」

メールを開くと、そこは、まあ星らしいっちゃそんな内容なわけ
ね・・・

件名：ごつめーん！

本文：ごつめーん！あのね！おねえさんと話盛り上がっちゃってさ！
コンサート終わったら、食事行こうって誘われちゃった！
だから、先に帰っててもいいですっ！ごめんね〜

季唯

・・・

結局そうなのね？

てか！来た意味ないじゃないか！！

・・・はあ・・・。無意味すぎ・・・さいっあく・・・。

「お客様、ご注文・・・は・・・」

不意に店員さんの声が聞こえてあたしはケータイを落としそうにな
る。

「わわっ！す、すみません（汗）えっと、ブラックコーヒーで！」

「かしこまりました、お客様、なにかお悩みで？」

「え・・・あ、いやあ・・・（笑）友だちの素ボケっぷりに絶句し
てて・・・」

「そうですかあ（笑）でも、かわいらしいお友達みたいですわね？」

「え？ええ、まあ・・・」

「そのストラップ、見たらなんとなくわかります」

店員さんがさしたのは、星とおそろいにした、クマが星ほしを持つてるストラップだった

「店員さん、エスパーみたいですね？」

「そうですね？見たら、わかりますよ？コーヒー、お持ちいたします」

そういつて店員さんは奥に引いていった。

気さくな店員さんだなあ・・・と思いながら、また、本を読む。

「コーヒーお持ちいたしました。ごゆつくり」

店員さんはにこつと笑ってまた奥へ引いていった。

ケータイを見て、あたしはびっくりした。

なにしろ、もう3時間ちよいはたっていたからだ。

「はやいなあ・・・」

そう呟いたときだった。

「なにが早いのかなあ？女優セシルの娘の東堂癒菜さん？」

後ろから声がした。

今度はまったく動揺もなかった。

・・・また、皇君の声だった。

「・・・セシルの娘ですが、なにか？」

あたしなりに答える

「マネージャーの件断るとか、できると思ってるのかな？」

「ええ、まあ。あたしの意思ですし」

「コンサートに乱入したくせに？」

「あれは翔君が悪いんですよ。」

「ま・・・なんでもいいけど、断る権利とか一切ないから」

「・・・なんであたしなんですか」

「美人だから。」

「はあ？！それだけですかあ?!」

「んまあ・・・後は・・・秘密」

「はっ……とにかくお断り……」

「俺がお前を任命してやるよ」

あたしの言葉は、遠くから、だけど良く通る声で遮られた。

……零君だった

近くまで来ると、零君はニヤリと不適に笑い、あたしに告げた。

「お前、俺らの事興味ないんだってな？なら、お前が俺らの事が好き……いや

正確には俺の事が好きっていうまで、絶対話してやらねえ」

……

意味がわからない。

興味ないけど、なぜあたしが零君のことを好きにならないといけな
いんだ？！

「ちよ、ちよつとまつて？！意味わかんないって！」

「だーから、俺の事すきになるまで、まねやらせるってわけだよ。

こんな美人が俺に興味ないとか、まじ許せないし？」

「……色々おかししいし間違ってるけど訂正しないでいいんだね
？」

「ああ、別に間違ってるない」

「ちよつとまつて、一つ訂正させて。あたし、美人じゃないし。」

「そこは一番訂正しないでいいところだし。まーとりあえず、こい
無理矢理腕を捕まれて、また楽屋のほうに連れて行かれる。

「まつてって！あたしが行ってもいいこと起こらないし！」

「いいから、こい。否定権ないから」

零君ってむっちゃん俺様！？

もうっつ！

無理矢理すぎなんだし！！！！

***第5話* (前書き)**

第5話をご覧くださいませ

* 第5話 *

「改めて見ると、マジで美人だな？」

「ほんと・・・僕もココまで美人は見たことないわ・・・」

「俺が見込んだとおりだけど、すごいな・・・」

「つか、皇、ココまでの美人さんどこで!？」

「さすが女優セシルの娘だ・・・」

あたしを見ながら口々に言うこの人たちは馬鹿じゃないのか？

てか・・・

「女優セシルの娘ってのやめてください。」

「なんで? いいじゃん」

「あたし、別にあんな人親とか思ってたないから。」

ていうか、1年に1回帰ってくるかも分からない人を親と呼べますか？

「え、まじで？」

「ええ、まじで」

「ま! いいじゃん! 今日から俺らが家族だからさ!」

「んまあ、そういうことになるよな? 当分家には帰れないと思えよ」

「てか、お引越しししちゃったほうがはやいんじゃない？」

「ああ、そうだな？」

「ちよつとまつてよ! ? あたし、引越する気とかないし? !」

第一、家出たいと思ってるないしっ」

「強制的にそうなるから。言っただろ? 俺の事好きになるまで、離せネエって」

「ふっざけんなあつ! まねなんて適当にいるだろっ」

「いや・・・実は俺らここ2ヶ月はマネいないんだよね」

「は! ?」

「いや・・・なんか、やめちゃってね」

「あのマネはちよつと酷かったよな」

・・・

なんか、そのマネさんがやめる理由が分かる気がする。
ご臨終です、元マネさん。

って、そうなればあたしもこっからご臨終人生ってわけ？！

「はあ・・・なんか今から憂鬱・・・なんですが・・・」

「まあまあ、仕方ないよ。癒菜、兄妹兄弟姉妹あり？」

「大学生の兄が・・・」

「おお・・・さぞイケメンで・・・」

「だろうな、女優セシ・・・つつ！？」

あたしは雷君の言動を胸倉を掴んで遮った

「金輪際、母の名前を出さないで。てか、あの人は母親じゃないから」

凄い剣幕だったんだらう。

雷君は凄く目を見開いていた。

「・・・ごめん」

「分かってもらえればいいんです。んで、兄がどうか？」

「ああ、いや。兄弟がいるなら、そこは許可取っとかないと思うてね？」

皇君の発言に零君以外の人は頭にハテナを載せた。

「アレ。てか、お父さんにすれば・・・？」

「阿呆。セ・・・癒菜のお父さんは病気で亡くなってるよ」

「え・・・あ・・・ああ・・・」

父さんのことでそこまで動揺しないでほしいんだけど・・・別に、まったくもって気にしていない。正直父さんの記憶なんてない。

父さんも有名俳優だった。けど、まだ若いのにがんでなくなってしまった。

名前は東堂郁兔、35歳で死亡。

あたしはまだ小さくて、ほぼ記憶なし。

「とりあえず、お兄さんに電話して？引越しの人に来てもらうから」
「ああ・・・別にあたし取りに行きますけど・・・」
「なんの裏もなく言っただけだったけど、
零君にはまあ・・・伝わらなかつた様子で・・・」
「途中で逃げたりすると面倒だから、センターの人にきてもらう。
ほら、早く電話しろ。」
「なっ・・・。分かりましたよ！んも・・・」
「にちゃんは2コールほどで出た。
いつもながら、はやい。」

『もしもし？ゆー？』
「にちゃん、こんな時間にごめん。今、大丈夫？」

『ん？全然構わないよ？今休憩中だから』

「そっか、あのさ、本題なだけどさ。にちゃんさ今人気急上昇
中の人気高校生アイドル
ベルガク工房って知ってる？」

『知ってるよ？今、大学でも人気急上昇中』

「そ、そうなのね・・・（笑）でね・・・今日、

あたしコンサートに行つて、カクガクシカジカ・・・ってワケで・・・

なぜかマネに任命されちゃったわけなんだけど・・・」

『それまた、おめでたいな？』

「どこが！・・・！」

『色々。』

「んも・・・。まあ、それでさ引越しをしるといわれてるんだけ
ど・・・」

『え、まじで！？』

「ええ、大マジですとも。で、今から引越しの人らを向かわすとか
ほざいてるんだけど」

『・・・べつにいいけど・・・母さんみたいには、なんなよ・・・』

？」

「にいちちゃんもやっぱりそこは気にする・・・よね」

「うん、少なくとも月一回は戻るよ？うん、ありがとうね。」

「次数学？そっか、頑張ってるね！また明日！」

「・・・ことです。引越しの人に言っておいてください。」

あたしの部屋以外触らないでって。あたしの部屋のドアに『癒菜』
ってプレートが

掛かっているから、分かると思う。」

「わかった。零、電話よろしく」

「わあった・・・。ああ、引越しセンター？俺、零だけど。」

「今からって、癒菜、住所は？」

「えっと、000×××　　？-?-？」

「らしいから、その家に入って癒菜の部屋のもんだけ

俺らの家を持ってきて。うん、そう、ああ、後、癒菜の部屋以外触
らないように。

常識だと思っけどさ。ん、んじゃ、よろしく」

何て適当な・・・

別にいいけどさ・・・その人ら、知り合いだよね？

知り合いじゃなかったらやばいよ。本間に。

「そーれじゃ、家かえろーか」

「んまあにい・・・今日は疲れた・・・」

「皇のにいちちゃん、今日は車回してくれる？」

「ああ、外で待ってる。あ・・・そーいえば出待ちの子、今日もい
るか？」

「おーってことは、いきなりマネ参上？！」

「え・・・まじですか」

「大マジだよ？ちなみに、俺らはサインすべて拒否、握手もすべて
拒否。」

警備員は一応配置してるけど、それでも前に出てくる非常識が多く

存在するから

そこは俺らのまもれよ?」

「……こいつ、どこまでいっても俺様か。

まあいい、やってやるうじやないか

「はいはい、ベルガク工房様のお通りですか」

「マア、そんな感じ」

「んじゃ、いきますよ。用意してきてください」

「…………へえーい」「…………」

みんな、各自自分の楽屋に戻ると、スグに荷物を持って廊下に出てきた。

あたしはめがねをかけ、ネクタイをきつちりしめて、髪をポニーテイルにする

「おお、マネっぽい」

「マネですから」

「ああ、そうか」

「そんな感じしないな」

「あんたらが任命したんでしょ!」

「…………ばれた?」「…………」

ほんまなんだ、このひとり……

外に出ると、出待ちの子がまあ、余裕で100人は……

「きゃああああ!!!!!!」と言う声とともにどんどん前へ出てくる。

警備員さんもほぼ止められていない。

「ベルガク工房にすかれないのなら、行儀よく待つのが常識です。」

あたしは大きな声でそう、述べるよ皆あたしをみて「あんた何様?

!」とか

口々に言い出した。

なんじゃこいつら!腹立つは!!!!

「ベルガク工房のマナージャーをさせていただきます、東堂癒

***第6話* (前書き)**

第6話ご覧くださいませ

* 第6話*

さっきの事件から約10分後。

「おーっしっ！ついた！」

と桐也さん・・・が声をかけた。

あたしは車から降りて、後ろのドアを開けた。

「癒菜さんきゅ」

「癒菜ちゃん、ありがとう」

「ゆーさんどーもっ」

「あんがとーっつと」

「どーもっ」

口々に車から出て行く。そして・・・あたしの丁度後ろに広がる

この上でかい建物はあったか・・・と思うほどの

豪邸にむかって歩いていく。

それをみてふと思う。

・・・皆やつぱ格好良いよね・・・？

てか、あたりまえ？だよね・・・（笑）

「桐也さん、ありがとうございました」と

そそくさとその場を立ち去ろうとしたら、また腕を捕まれて引き寄せられた。

「あんな猿に教われんじゃネエよ？」

と言って、ニッコリ笑ってあたしを解放した。

・・・ええ・・・それだけでああですか。

てか襲われる？零君とかが？

「ああ・・・ないない」

あたしなんか襲われるとか、ありえないでしょ（笑）

あたしも豪邸に入っつていった。

・・・中は・・・まあ、思ったとおりありえないでかさなわけださ・

真つ白な猫足のソファアが4つとか・・・てかシャンデリアって・

「でかいなあ・・・。迷いそう」

「そうか？女優セシルの娘なら・・・あっ！」

雷君はまた口を滑らせて、セシルの名前を出した。
・・・。

「別にいいですけど・・・連呼とかしたら、アイドルでもなんでも
八つ裂きにしますよ」

「おお、こえ〜！まあいいけど？正味、女に代わりはないわけだし
こつこつ風だ！」

「へ？うわっ」

気付くとあたしはあの豪華な真つ白いソファアに
雷君が上にいる状態になつてゐるわけで・・・（＝押し倒されてま
す）

「襲う事なんてちょちょいのちょいってわけ」

ニヤリ・・・と笑う雷君が不気味に感じられた。

「い、いや！ちょ、ちよつと！」

顔を近づける雷君にあたしはためらうばかり。

つて、あたりまえじゃないか？！

そんな事を思つてると、また手を引つ張られた。

と、思えば体が浮いて気付けば次は誰かの腕の中・・・

「癒菜はてめえのもんじゃないから」

零君だつた。

「零のもんでもないだろーが」

「俺のもんだし」

「おいおい、その二人。癒菜ちゃんはダレのもんでもないと思う
んだけど？」

「いや！ダレのものってわけじゃなくて、みんなのもん！」
と言うと、真君が零君を軽く突き飛ばして、あたしの後ろから抱きついた。

「ぬわっ！つと、真君っ」

「みんなのもんだもーん、俺のもんだもーん」

「まさかのこの子は素でこれなのか？！」

素って怖いな・・・なんて思っていると

「おまえらなあゝ！俺にもわたせっ」

とか言つて、次は翔君の腕の中。

「たくっ！それじゃあぼくのもものでもあるよな！」

次は皇君の腕の中。

「ちよ、ちよつと、ま、まっつて」

「待たないよ、皆本気だと思っつから」

皇君をみると意外と真剣な表情（意外とは余計。）

「な、なにに本気？！」

「・・・」全員お前に惚れたって意味「・・・」

・・・

えと・・・。

あなた様たちは今、なんとおっしやつたんでしょうか・・・？

「癒菜、お前理解してないだろ」

「ええ、まったくもっつて」

「だと思っつた・・・。まあ、簡単に言えば全員が全員

癒菜に一目ぼれしたってワケ」

「へえ、そうなんだー」とかいえるはずもなく

あたしはただポカン・・・と・・・

「てか！皇！その手を離せ！」

あたしの肩を抱いていた手をちよっぷして

真君がまた抱きついてきた。

「ほんと・・・真つて子供みたいだな」

「俺まだ高校生だもん。十分子供！」

「はいはい、そうだったな。てか、お前も離れる幼稚園児！」
次は零君がバシツと真君の頭をはたく。

「それじゃ癒菜をお部屋にご案内ってことで、行くぞ」

零君がこの展開から、また冷静に戻って言うてくるものだからあたしは「え？」と聞き返してしまった。

「え・・・つて、くつ・・・！気が動転してるのは分かるけど・・・とりあえず、ついてこいつて。迷子になんぞ？」

と零君はあたしの腕を掴んで早足で歩き出した。

後ろではわあわあとまあ、犬がいつぱい・・・

桐也さん・・・猿じゃあなくて犬ね、うん

廊下を3分ぐらい歩いた頃。いきなり零君の背中が止まってあたしはぶつかってしまった。

「つ・・・す、すいません」

「別にそんな事で謝らなくて良い。癒菜、あいつらにも俺にも気をつけるよ」

「へ・・・？何を・・・？」

「色々だ。俺らは他の奴らと違って、忙しかったりなんかすると急激に食2割・睡眠2割・性欲6割に増加するからな？」

・・・人間の三大欲求ってわけか・・・

「んと・・・気をつける」

「ん、そうしろ。ほら、ここ。癒菜の部屋。疲れてたら寝てていいから。」

晩御飯は俺が作るし」

「あ・・・うん、ありがとう。ごめん」

「いいんだよ。別に。俺らが巻き込んだ事だ、じゃあな」

方向を転換してあたしにセを向けて、手をヒラヒラとしてさっつていく零君。

・・・なんか、意外と優しい？

あたしは部屋に入ると、目を見開いた。

「・・・お姫様の部屋みたいだ・・・」

あたしの部屋になったところは、ベットに天蓋がついているような本気で本当のお姫様の部屋のようなようだった。

「・・・てか・・・広いなあ?!」

にいちゃんと住んでたときの

リビングほどはあるな・・・(アパートだけどねえ)

あたしはベットに座って、ため息一つ。

「はぁ・・・。疲れた・・・。」

この言葉であたしはこてん・・・とベットに転がりいつのまにか眠ってしまった。

- p r e i -

P M 7 : 0 0

「そろそろ癒菜ちゃん、誰か起こしてこいよ」

「んじゃ、俺行ってくる。」

「襲うなよ?!」

「襲うか、ばあか」

俺は癒菜の部屋に向かった。

一応説明しとくけど・・・

癒菜の母親と俺の父親は・・・不倫関係にいた。

いや、現在続いている状態だから関係にいる、が正解だ

俺はそれをうんともすんとも言わずに

ただただ耐えているだけだった。

癒菜の父親が病死したのは嘘・・・らしかった。

後余命3ヶ月は残っていたのに、急に誰にも見取られず死んだらしい。

俺の母親に聞くと(俺の母親は歌手)アレは俺の父親が・・・

・・・点滴を全部とって、拳句の果てには口元を押さえつけた・・・

簡単に言えば、殺人だ。殺人。
動機はどうやら、不倫がばれないように・・・らしかった。
だから、俺は癒菜が心配だった。
それを癒菜が知っているのならば
こんなところ居たいわけがない。

コンコンッ

「癒菜？ 晩御飯、出来たから呼びにきたんだけど」
・・・返事無し・・・っ

ほつたらかしたつても酷いよな・・・
入るか・・・でも、鍵閉まつてるか・・・
一応ドアノブを回す。と、まあ、極普通にカチャッとドアがあいた
わけで・・・

「無用心にもほどがあるだろう・・・！」
俺が咳いても起きる気配はなかった。

・・・やっぱ、疲れたよな・・・？

「癒菜、晩御飯・・・っ・・・」

俺は癒菜の寝顔を見て、赤面中・・・
ば、ばか！ 俺！・・・まあ・・・

スキなのに変わりはない・・・から・・・な

「襲うなよ?!」って言われたが・・・

襲わずにられない・・・状況ってか・・・

っ！か、癒菜のこの無防備が悪いんだよっ

「ばーか・・・」

額に一つキスを落として、癒菜を揺さぶって起こした。

- r e i . e n d -

「ん・・・」

「晩御飯だけど？」

「あ……うん、今行く……」

あたし爆睡したんだっけ……

ああ……見出しもぐっちゃぐちゃ……どうしよかな（笑）

「ごめん……。先行ってて？髪ぐちゃぐちゃだし、後で行く」

「別にいいっての。ほら、髪の毛下ろしてネクタイ外して……」

零君がポニーテイルしていたゴムとネクタイをスルリと外した。

「ほれ、いくぞ」

「あ、はい……」

やっぱり、零君って優しいよね？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8327y/>

君はアイドル

2011年11月30日21時48分発行